

GHOST. GILLETTE MAN.

A Cemetery Conversation



Ferdinando Frega

幽霊。GILLETTEの男。

「私はただの幽霊なのです」

The P&G Saga · 20

その朝、私は歩いて墓地へ行った。父の誕生日の記念日だった。長い道のりを歩いたあとで、少し休もうと立ち止まり、座れるベンチを見つけた。そこにはすでに年配の紳士が二人座っていた。

私は二人に挨拶した——見知らぬ人についての、私のガリラヤの同業者が残してくれた古いルールだ——そして息を整えようと腰を落ち着けていると、二人が大きな声で話し始めた。開けっぴろげの会話で、どう見ても秘密にするつもりなどまったくないらしかった。すぐそばに私が座っているというのに。

若いほうが年上のほうに、自分はどんなふうに死ぬと思うか、葬式には誰に来てほしいかと尋ねた。相手は答えた。「わしの年じゃ、まだたったの96だが、もう頼みごとはほとんどない。死ぬときに知り合いがみんな来てくれるとも思っておらん。その前に、こっちから、彼らがどこにしようかと別れを言いに行きたいからな」

そしてお返しに、老人は若いほうに尋ねた。「で、あんたはどう死にたい？」

「そうだな」と彼は言った。「おれは62で、銀行やらノンバンクやらで26件近くローンを組んで、そのうえ一生見ることのない家の住宅ローンまである。で、このろくでなしどもは、おれが先に死んだときのためにと、そろって大急ぎで保険に署名させやがった——自分たちのケツはちゃんと守った

ってわけだ。一方、死んじまえば、国は税金の請求も罰金も全部帳消しにしてくれる。遺産のほうは、残すものなんか何もない。持っていたものは全部、人生で出会ったすべての女にきっちりくれてやった——ただし『少しずつ』っていうルールでな」

「不躰な質問と好奇心をお許してください。その『少しずつ』というのは何だったんです？ お金ですか？」

「いや、あんた。愛だけさ——ただし戻ってこない種類のな。この世に生み出されるときの命と同じでな」

二人はどっと笑い出し、私もつられて笑った。それから二人は私のほうを向いて、どう思うかと尋ねた。

「お話を聞かせていただいてありがとうございます。お二人とも私が見えるようでうれしいです。私はただの幽霊なのですから。そしていまこの瞬間に私たちの目が合っているのなら、それはお二人とも正しい道の上にいるということです。御父の家へと続く道の上に」

二人は跳び上がって、自分の金玉をつかみ——イタリアに昔から伝わる厄よけのまじないだ——一目散に逃げていった。

皮肉なちょっとした冗談を言い終える暇さえなかった。「セマンティックな予告編」だけで、二人は恐怖のあまり崩れ落ちたのだ。そのとき私は、言葉がどれほど強いかを悟った。

これからは、いまま先々も、もっと気をつけなければと思った。私もまた幽霊に出会う危険を冒すかもしれないのだから——そしてその幽霊は私に尋ねるかもしれない。ウェブの人々に出会うには、ADSやSEOにお金を払う必要があるのか、それとも私のようにやるのか。つまり、なしで、と。

Ferdinando